

タ リ タ ・ ク ム

“Talitha, koum”

「少女よ、私はあなたに言う。起きなさい」(マルコ 5:41)

日本聖公会 正義と平和委員会・ジェンダープロジェクト

第32号

2018年10月25日

〒162-0805

東京都新宿区矢来町 65
日本聖公会管区事務所気付
正義と平和委員会

・ジェンダープロジェクト

TEL 03-5228-3171

発行責任者:篠田 茜

女性の司祭按手 20 周年に思う

～人々の祈りにかづけられて～

司祭 アンナ 三木メイ (京都教区)



あれからもう 20 年経ったと思うと、感慨深いものがあります。それは重要なターニング・ポイントと言える出来事でした。私はこの問題を巡って多くの人々と出会い、学び、絶望と希望の間を彷徨いつつ励まし合い、終には閉じられていた扉が開かれ、新しい道が備えられて希望を見いだすことができた、と感謝をもって想い返すことができます。女性司祭実現を求める多くの人々の祈りと願いがあつてこそ、歩むことができた道でした。

私が女性の司祭按手の実現を求める運動に実際に関わるようになったのは、1989 年頃からでした。アメリカやカナダの聖公会では、すでに 1976 年に女性司祭按手を実現していましたが、日本では「女性司祭を考える委員会の設置」議案が十分な議論もされずに度々否決されるという状態でした。なおかつ、私の友人の女性の聖職候補生が、結婚を機に退職を余儀なくされるという事態が起きました。その頃、私は同志社大学神学研究科を修了して聖書科の非常勤講師を始めた頃で、当時は聖職志願の意思は全くありませんでした。しかし、「女性だから」という理由で聖職への召命が否定されていく現実を目の当たりにして、日本聖公会の在り方に疑念を抱くようになりました。

1989 年、東京で「女性が教会を考える会」と名づけられた十数名の小さな集會に出席しました。参加者が本当の気持ちを分かち合うなかで、教会のなかに「女性だから」という理由で役割や生き方や働きが制限されまた強制されてしまう現状があることを改めて知りました。そして、このままではいけないと感じていたある日、道を歩いている時に、神さまから「おまえがやらなくてはいけないよ」との声を聞いたような気がしました。「ああ言われちゃった、でもこれに手を出すと大変なことになる」と思ったのを覚えています。

1990 年日本聖公会総会で他の女性たちと共に発言し、やっと「女性聖職の実現を検討す

る委員会」が設置されました。私は「女性が教会を考える会・京都」を発足し、京都教区報に「マリアたちのサイン」というコラムの連載を開始。フェミニスト神学を学び、1992年には北川規美子さんと共に第1回「聖公会女性フォーラム」を開催。公開講演会なども度々企画、実施しました。

このように、公的にも草の根的にも女性の司祭按手実現に向けて大きく動き始めた頃、海外から力強い支援者が来日してくれました。アメリカ聖公会の最初の女性の補佐主教、バーバラ・ハリス主教、そしてスザン・ハヤット司祭の講演と交わりには大いに励まされました。

しかし、女性の司祭按手はなかなか実現には至りませんでした。アンケートでは約70%が賛成でも、当時の教区主教のほとんどが女性司祭反対を表明していたからです。1994年に「女性の司祭按手をめざす会」という有志の団体を発足。発起人41名の半数は、男性教役者・信徒の方々でした。この会は実現を望む署名を呼びかけ、2か月間で1108名の署名を集めました。同年の総会で議案は継続審議となりました。それでも、多くの人々の祈りと願いが少しずつ道を開きつつあると、希望をもつことができた時でした。

このように私は女性司祭按手の実現の運動に深く関わってきましたので、「三木メイ」という名には、ウーマンリブの女闘士(?)のようなレッテル貼りがされたと感じました。しかしそれよりも、初期に聖職志願をし、パイオニアとして司祭按手を受けた女性たちは、より厳しいさまざまな苦難を経験してきました。それぞれの十字架を負って召命に応える道が開かれたことを主なる神に感謝して、さらに真実に神の御心にかなう教会の姿を求めて、喜びと勇気をもって、共に歩んでまいりましょう。

教役者コーナー 女性の司祭按手 20周年を迎えて ～人々の祈りにかづけられて～

司祭 マリヤ 小貫ツマ (北海道教区 退職)

全国の主に在る兄弟姉妹の皆様、主の平和！

私は1981年4月小樽聖公会の牧師であった夫を突然の心筋梗塞で失い、全国の教会の皆様からの暖かいお祈りとご支援を頂きました。この場をお借りして深い感謝を申し上げます。その後小樽に留まり聖職への道を歩ませて頂きました。私は大学でキリスト教の倫理学を学び、卒業後3年間横浜の成美学園の小学科で聖書科の教師をさせていただいた経験があります。その頃聖公会のある司祭と出会い、聖公会の魅力を感じました。その後友人の紹介で北海道の深川で聖職であった夫と出会ったのでした。そのような経緯もあつたからか、私は夫の死後、渡辺政直主教のお勧めに従って小樽に留まり、札幌の牧師達のもとに通いながら、レポートを提出するという形で学ぶことを許されました。そして夫の死

から半年目に伝道師に認可されました。

1984年4名の方々と共に執事按手を頂き、1999年6月に司祭按手を頂きました。教会勤務は小樽、札幌、室蘭、有珠、平取、新冠で働かせて頂き、定年退職後は札幌に1年半程留まりましたが、家族のいる東京に移り、ここ葛飾区にあるケアハウス・サンピエールに入居し、15年にもなります。

ここでは施設内に葛飾茨十字教会があり、客員ですが、オルガンのご奉仕をしたり、東京教区内の教会の礼拝に時々ご奉仕をさせて頂ける機会もあり、感謝のうちに過ごさせて頂いております。

女性の司祭職が与えられて20年の間に司祭に叙任された方は聖公会手帳で調べますと23名程おられます。私はこの数を少ないとは思いません。歴史的に男子優先の教会世界が続いて来た影響



2013年イースター 東京聖マリヤ教会

もあると思います。プロテスタントの他の教派には女性の牧師が、社会的にも大きな働きをなさった方々がおられます。聖公会でも宣教師や婦人伝道師の方々が宣教師として伝道や社会事業に大きな働きを遺された事は周知のことです。

最近京都教区の三木メイ司祭が同志社大学での礼拝と教会でなさいました奨励・説教をまとめられた『嵐と風と不思議なマント』が出版され、読ませていただきました。この説教集にあるように、主に呼ばれた者は教役者であれ、信徒であれ、同じように様々の苦難と激動に揉まれながらその時々「復活の主イエス」と出会い主に生かされた喜びを与えられています。この喜びを分かち合うのが信徒と教役者の群れであると信じます。特に教役者はその分かち合いを助ける者として召されているのではないのでしょうか。神様からの知恵と力が凡ての信徒・教役者に与えられますように。

第26回聖公会「女性」フォーラム IN北海道

発題：石原真衣さん 「サイレント・アイズ」の物語
～〈人間が(アイズ)住む大地(モシリ)〉で痛みと豊かさ考える～
2018年7月15日(日)～16日(月) 会場：札幌キリスト教会

聖書とともにあゆむ「女性」の集い
【北海道】とわたし、そして「女性」フォーラム
エリサベツ 大町美幸 (北海道教区)

30年前、札幌で、私は乳飲み子を連れて、聖公会、カトリック、日本キリスト教団、

日本キリスト教会、メノナイト教団などの超教派の女性が集まり、女性神学を学びあう、「女性神学研究会」という会に参加していました。10名に満たない小さな会でしたが、私はその会に参加できることが心から嬉しく、ひと月に一度の会に毎回出かけていました。聖書を自由に読み、色々な試みをしながら、「女性」であるわたしたちの存在を問い、話し合いました。日常では、牧師という職業の一男性と結婚していたわたしは、教会で「奥さん」と呼ばれる機会が多くなりました。また、「〇〇ちゃんのお母さん」とも呼ばれるようにもなりました。奥さん、お母さんと呼ばれることで失った自分という人格に、あの頃はとてもこだわり、悲しくあったのです。

その後夫の転勤が何度かあり、女性神学研究会のような会と親しくなることもなく過ぎました。そして歳も50を過ぎて、精神的にかなり冴たくなりました。そして残された年月を数える年齢を迎え、やりたいこと、やってこなかったことを考える、そんなわたしがおりました。

やりたいこと、やってこなかったことの中のそのひとつに「女性」一小さくされたもの一が共に聖書を読むということがありました。若かったころのように自由に話し、自由に聞き、自由な発想で聖書に接する、そんなことができたらどんなに楽しいだろうと考えました。

そこで、今は聖公会神学院に入学された三浦千晴さんら数人に声をかけ、一緒に、どの団体とも対立することのない、【聖書とともに歩む「女性」の集い 北海道】を始めようということになりました。小さな会ですが、聖書を読み、お茶を飲んで自由に話すその為だけに集まっています。わたしの聖公会「女性」フォーラムへの参加は、岡山、岡山、福井、東京そして札幌の5回です。それぞれに味があり、迎える方も迎えられる方も一生懸命な姿に接してきました。

何度目かの参加から「次は北海道で」という声を聞くようになりました。でも、ひとりではできないことです。三浦千晴さんと参加した第25回聖公会「女性」フォーラムの時、一つの決意をしました。実行委員会の受け皿として【聖書とともに歩む「女性」の集い 北海道】の力をお借りしよう、ということです。そしてそれが実現し、慣れないことに戸惑いながらも準備は進みました。

北海道は広いのです。バスで3時間かけて実行委員会に駆けつけてくれる司祭もいました。こうして第26回聖公会「女性」フォーラムは7月15日、16日と会場は札幌キリスト教会で開催されました。

わたしの小さな夢は 聖公会



閉会聖餐式を終えての集合写真。今年は垂れ幕が下がりました

「女性」フォーラムを開催するという大きな奉仕へとつながりました。神様の御守りに感謝して、これからの聖公会「女性」フォーラムの発展をお祈りいたします。

第26回聖公会「女性」フォーラム in 北海道に参加して ～平和の資源としての痛みの意識化～

司祭 バルナバ 小林聡（福井聖三一教会、敦賀基督教会）

2018年7月15日、16日、札幌キリスト教会を会場に女性フォーラムが開催されました。参加者は日本各地から集まった34人。他にも札幌キリスト教会の皆さんをはじめ、沢山の方々がプログラムに参加されていました。この女性フォーラムは「女性」をキーワードに教会に連なる者たちの痛みや喜び、また課題を色々なテーマを通して学び、分かち合い、力づけられるための集まりと理解しています。



発題、石原真衣さん。15日19時。
フォーラム参加者の他にも40名以上の参加者

「サイレント・アイヌ」の心の痛みがありました。アイヌのルーツを持つ石原さんは、アイヌにも日本人（和人）にも自分を位置付けることに違和感を覚えてこられたというのです。

石原さんの言葉を借りるならば「アイヌの人々の痛みや、アイヌの出自を持ちながら、アイヌの歴史や文化、他のアイヌの人たちに対して、親近感を持たず、家族ともアイヌの問題について語ることもできず、社会の中でたった一人沈黙する『サイレント・アイヌ』の心の痛み」について問いかけられたのでした。

私は、今回次のことを心に留めました。まず、石原さんが発題の始めの所でアイヌ遺骨との出会いに触れられましたが、石原さんが学ぶ北海道大学だけではなく、沢山の全国の大学が墓を掘り起こしてアイヌ遺骨を集めていたことは、和人にとって悔い改めるべき大きな罪であり、その中に私もいることを思い起こされる問いかけでありました。

差別し、無視し続けてきた者としての和人の姿、またそこに属する自分の姿を思います。私は福井からの参加ですが、福井はアイヌに対する搾取の象徴である北前船で栄えた街であり、北海道とのネットワークは今もホウホク銀行（北陸銀行と北海道銀行ネットワーク

の日本最大の地方銀行)としてつながっています。福井でも明治幕府が開かれて150年の記念行事が行われていますが、それはアイヌを置き去りにしてきた150年でもあります。

次に、石原さんがまとめのところで、アイヌとは「人間」という意味であり、人間とは何かを問い、人間の持つ痛みや豊かさとは何かを共に考えるならば、新たな未来を拓く可能性が生まれると語っておられたことは大きな希望の言葉となりました。個々の歴史、個々の思い、個々の歩みをどのようなつながりの中で生きてきたのかを見つめることの豊かさが示されました。忘れられた痛みに向き合うという生き方の一つとして、石原真衣さんのお父さんのエピソードが語られていました。お父さんは大学卒業後、沖縄の阿波根昌鴻さんの所で過ごされ、それから札幌で古書店を営まれているとのこと。痛みに向き合ってきたお父さんの姿もまた、石原真衣さんにとって、少なからぬ影響を与えておられたのではないかと想像いたします。それはまた世代を超えて共に生きる地平が開かれる生き方でもあると思いました。

最後に、石原真衣さんはアイヌモシリの意味を人間が住む大地として語りながら、さらに人間全体の解放を共に求めて生きる共同体のイメージを語られました。「そこに生きる人間とは自分以外の他者の痛みを想像出来る者」。わたしはこの言葉をゆっくりじっくり温めながら生きていきたいと思いました。フォーラムのパンフレットのところには石原真衣さんの発題のテーマが「沈黙にふれて ～イランカラプテ (あなたの心にそっと触れさせていただきます)」と書いてありました。アイヌ語の挨拶の言葉です。石原真衣さんの発題はイランカラプテそのものでした。この言葉、この心、あなたの心にそっと触れさせていただきますという思いを日々の生活の中で意識していきたいと思います。石原真衣さんありがとうございました。

今回、準備してくださった北海道の皆さんの思いに感謝いたします。色々な思いをそれぞれの方が持たれていたことに触れることができました。そのような思いに触れることが出来たことが大きな祝福であったと思います。今回私は個人的にアイヌ料理を食べさせて頂いたことが感謝でした。特にプリンのような赤いデザートをもう一度食べたいです。今福井にいて、日々の暮らし、食事、言葉一つ一つを振り返っています。今回も参加でき沢山気づきを与えられました。ありがとうございました。

CCEA (聖公会東アジア教会協議会) に参加して

平和と和解をめぐるプログラム

クララ 篠田 茜 (京都教区)

9月12日から17日まで、韓国の大田(テジョン)教区、天安(チョナン)でCCEAが開かれました。CCEAは主教会議がその始まりで、今もそれは変わっていませんが、今年初めて「女性枠」が設けられ、マレーシア、フィリピン、台湾、香港、ミャンマー、オー

ストラリア、韓国、日本から、女性も含め約100名が集まりました。日本からは女性枠として下条知加子聖職候補生とわたしに参加させていただきました。

テーマは「21世紀のイエスの使徒—平和と和解の使者」、イギリス、オーストラリア、マレーシア、アメリカ、韓国からの多彩なゲストのお話によるグローバルな視点からこのテーマを学ぶ時間が6日間をとおして用意されていました。



韓国などからの参加者

USPG 総主事による聖書からのアプローチ、ACC セーフ・チャーチ委員会委員長と3人の委員（沖縄教区のハム・ユンスク司祭もおひとりです）による子どもを含め教会に関わる人のための教会内での平和と和解についての講演及びグループワーク、アングリカン・アライアンス東アジア責任者からは、子どもや青年の教育援助や政府などへの働きかけを行っていることが説明されました。

セーフ・チャーチ委員会からは、報告が増え続けている聖職者からの虐待（日本ではハラスメントという表現も多いですが）について、ガイドラインの説明がありました。グループワークでは、虐待のある場での支援や虐待の訴えへの効果的な応答について、このガイドラインが有効であるかどうか、変更点が必要かなどを話し合いました。聖公会の多くの教会で様々な虐待が明るみに出されつつあります。委員会からは各管区に虐待に関するアンケートも送られており、2019年のACCでこのガイドラインが推薦されるようです。

3日目は、1グループはDV被害にあった女性のシェルターと障がいをもつ子どもたちのための施設へ、別のグループは児童養護施設へ。訪問した児童養護施設は、男子のための施設で10人ほどが共同生活をしています。壁には暖かい励ましの言葉が素敵な絵とともにそれとなく書かれ、木材を使ったベッドや家具とともにほっとする空間になっていました。大田には今14ほどこのような施設があるそうですが、もともとは大田教区のユ・ナクジュン主教が始められたとのことでした。

4日目、江華島（カンファド）の江華平和展望台に行き、北朝鮮をすぐ目の前に臨む高台にある望拝壇で、主教全員が前列に並び平和宣言が読まれました。ともに「来ませ来ませ」を歌い、「主の平和」を交わし、南北朝鮮の和解を願う感動的な場となりました。前日にあった朝鮮半島の平和と和解のための教会の役割についての講演では、「分断を越えて兄弟となる」ために



江華島での祈り一向こうは北朝鮮

は、何かを犠牲にする必要があるということでしたが、自分こそが正しいという思いを捨てることの大切さ（同時に難しさも）を思います。

朝夕の礼拝は各国が分担し、毎日のように平和の挨拶を交わしました。世界に目を向けると、そこには共通の、また違った課題を抱えつつ、平和を願い、ともにイエスの道歩む人たちがいることを実感し、そのことに励まされました。

女性のわかちあいについて

聖職候補生 セシリア 下条知加子（東京教区）

2日目の午後、女性の参加者（参加された主教の配偶者と各教区や管区からの女性の担当）が一堂に会し、分かち合いの時間が持たれました。

まず、スピーカーとして来てくださったテリー・ロビンソン司祭（英国聖公会／アングリカン・コミュニオン・オフィスの教会と社会における女性部門ディレクター）からのお話。世界の人身売買犠牲者の71%が女性と少女である、国連人口基金の発表では、アジアでは本来いるはずの1億6,300万人以上の女性が、女兒の中絶や新生児殺しなどにより存在しないなど、シビアな世界の状況が話された後、アングリカンの女性たちのこれまでの挑戦と成果について、7人の女性の例を挙げて、映像をスクリーンに映しながらお話してくださいました。

その後参加者が自己紹介をしたのですが、この時を待っていたかのように熱く、長くお話される方が続出。時間が足りなくなるのではとハラハラしましたが、何とか全員が話すことができました。それぞれが現場で様々な役割をもって働いておられる様子、また一方では夫が主教になったために仕事を辞めざるを得なかったことなど、女性たちの生の声を聞くことができたことは大きなお恵みでした。日本からは、女性の司祭が誕生して20年となること、12月1日にその感謝の礼拝を持つことをアピール。みなさんが祝福してくださいました。



婦人伝道師シリーズ ④ ボランティアの祈り

アグネス 北川規美子（大阪教区）

最近は記憶に留めることが難しい程、各地で台風、地震、大雨などによって引き起こされる被害が頻発しています。そして阪神淡路大震災（1995年）がボランティア元年と言われているように、被災地には少しでも復興の手伝いをしたいと駆けつける人々の姿が見られ続けています。

ところで1891（明治24）年に起きた濃尾大地震は、日本の社会福祉の世界に大きな影響があったこととして覚えられています。ボランティアな働き人が多く駆けつけたことが伝えられています。それは医療関係者のみならず、1887年に岡山孤児院を設けていた石井十次は被災地に通り多くの遺児たちを岡山に伴い、聖公会関係では小橋勝之助が1890年に開所（兵庫県赤穂郡）し、1892年より同労者として林歌子が献身していた博愛社（児童養護施設）も震災遺児を引き取っています。

また1887年に発会したヒルダ伝道団のミス・ソーントンや酒井正栄（前号に記載）も被災地を訪れ、その後ヒルダ孤女院（ジョン・ビショップ孤女院）を開設していますし、当時立教女学校教頭であった石井亮一は、震災遺児を引き取り聖三一孤女学院（後に滝乃川学園）を開所しています。おそらくこれらはほんの一例で、実際にはとても多くの人々が、更に思いを馳せると多くの宣教師や伝道師たちが駆けつけていたことが想像できます。

『ハンナ・リデル』の著者ジュリア・ボイドは「多くの宣教師たち、なかでも尊敬すべきキャサリン・トリストラムは、最もひどい被害を受けた地域に急行し、救助作業に手を貸した。彼らは完全に荒廃した光景を目の当たりにした」と記しています。

文中のキャサリン・トリストラム（前々号「タリタ・クム」に紹介）は英国（CMS）の宣教師で長い間大阪のプール学院の校長職にありましたが、『プール学院の110年』誌は「ミス・トリストラムは他のスタッフや生徒とともにさっそく被災地に出向き、岐阜県の大垣や今尾で看護婦として怪我人の治療などの救援活動にあたった。当時、外国人が日本国内を旅行するためには政府の許可を取らねばならなかった時のことである。ミス・トリストラムは濃尾地震で孤児となった7人の女の子を普溜（プール）女学校に引きとり、勉強させ、卒業させている」と記しています。尚、震災が発生したときトリストラムの許に滞在していたビカステス監督とその両親、妹のメアリーもその後、各々震災の復興に関わっていたようです。

ジュリア・ボイドは「キリスト教徒たちが熱心に救援活動を行い、被災者に代わって自ら危険や困難に取り組む姿を見ては、日本人も強く心を打たれずにはいられなかった」と記しています。濃尾地震がキリスト教禁令の高札が下ろされた1873年から20年も経てないことを考えると、彼女の言葉は尚更に現実味が増して来るように感じられます。

いる存在としては受け入れがたいという結果が出ました。また、職場の同僚が同性愛者だった場合、40代の男性管理職で、「嫌だ」と答えた人が71.5%に上るという結果も出ています。一般的にはLGBTの存在を認めつつも、身近な存在としては抵抗感を感じているという結果が現状であり、職場ではLGBTへの偏見がまだまだ強くあるこ

とが分かります。多くの良心的な人にとっては、差別はいけないから意識的に差別はしないけれども、身近にいたら面倒くさい存在が、わたしたちLGBTなのでしょう。

今回は、わたしたちカミングアウトしたトランスジェンダーが、日本聖公会の中で、面倒くさいと思われてるんだらうなと感じる出来事を分かち合ってください。



女性デスクより

◆11/30～12/1「女性の司祭按手 20年感謝プログラム」の日程が近づいてまいりました。別刷りのご案内を同封しましたのでご参照ください。11月30日(金)には女性の教役者リトリートがナザレ修道女会で行われます。12月1日(土)の感謝礼拝・交流会には、東京教区聖アンデレ主教座聖堂で行われます。今回は特に東京教区の聖歌隊もご奉仕くださいます。参加される方々にはいろんな役割もお願いする予定で準備を進めております。皆さま多数ご参加くださいますよう、お待ちしております。

◆「女性の司祭按手 20年感謝プログラム」の感謝礼拝(聖餐式)では、英国聖公会のテリー・ロビンソン司祭がメッセージを担当してくださる予定です。テリーさんは2002年に司祭按手を受けられ、今年オックスフォードのクライスト・チャーチ主教座聖堂のキャノンに任命されました。ロンドンの聖公会オフィスで「教会と社会における女性」部門のディレクターをつとめておられ、女性ネットワーク、ファミリー・ネットワーク、セーフ・チャーチ委員会などで国際的に幅広く活躍しておられます。

交流会は、これまでの歩みを振り返るとともに、これからのヴィジョンを語り合う、楽しい時にしたいと思います。皆さまのお祈りとご協力をよろしくお願いいたします。

◆「女性に関する課題の担当者(女性デスク)」が2006年に管区に設置されて以来、女性デスクとして大車輪の働きをしてこられた木川田道子さん(京都教区)が、今年の総会をもって退任されました。道子さんの仕事を推進する有能さと、類まれな包容力、誠実なお人柄にどれだけ助けられてきたか、感謝しきれないほどです。仲間内のことですが、記して労いと餞(はなむけ)とさせていただきたいと思います。長い間ありがとうございました。お疲れさまでした。

◆木川田道子さんの後任として、今総会期の女性デスクに任命されました京都教区の大岡左代子です。2002年に正義と平和委員会の中にジェンダーの課題を扱う部門ができて以来、ジェンダープロジェクトに関わってきましたが、今期は女性デスクとしての働きを担わせ

ていただくことになりました。もうそろそろ他の顔が見たい、と思われている方は大勢おられるのでは？と思います。木川田さんの後任としては全く力不足のわたしですが、できることをできるように、をモットーに、そして後の世代に引き継ぐことができるように努めたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

ジェンダープロジェクトより

◆酷暑の夏もどこへやら、季節は確実にめぐってすっかり秋になりました。今年は別の意味でもアツイ夏に。後藤香織司祭のコラムにも取り上げていただきましたが、「LGBT カップルは生産性がない」という自民党の杉田水脈衆議院議員の発言。続いて東京医科大学の女子受験者を含む入試得点に操作が加えられていたという報道。女性デスクとも協働で、前者は杉田議員個人あてと、安倍総理、二階幹事長あてに、後者は総理、林文部科学大臣（当時）、東京医科大学理事長代理、学長代理あてに抗議文を送りました。他の複数大学でも医学部受験に関して同じような操作が行われてきたことが文科省の調査で明らかにされてきており、それを認めて謝罪したり調査を始めている大学もあります。一方杉田議員の発言については、その後ご本人からの応答はもちろん、自民党からの公式な謝罪はありません。いつものように失望を感じながらも、おかしいと思うことに声を上げる勇気を持ち続けたいと思います。

◆前号でもお知らせしましたが、ジェンダープロジェクトに新メンバーが加わりました。京都教区の松山マリさんです。新たな視点を得たことを嬉しく思います。ともにジェンダーの課題について取り組み、発信を続けていきたいと思います。皆さまのお支えに感謝しつつ、引き続きよろしく願いいたします。

女性とは？

ジェンダープロジェクトでは、「女性」とはあらゆる社会構造の中で、立場が弱くされている人たちの一つのグループであるというとらえ方をしています。性の多様化の中、「女性」という表現自体が問題視されることもあります。タリタ・クムで用いる「女性」という表現は、「女性」の視点を大切にしながらも、男女二分法にとどまった性別用語としてのみ理解されるより、包括的な意味で理解される事を意図しています。

正義と平和委員会

ジェンダープロジェクトとは？

教会におけるジェンダー課題の共有と克服のために、すべての人が尊重されるネットワーク作りをめざして活動しています。機関紙としてのニュースレター「タリタ・クム」の発行(年3～4回)、学習会の開催、出前ワークショップの実施なども行っています。一人でも多くの方が、ジェンダーの課題に関心を持ってくださり、共に考えていける場をつくってほしいと願っています。

タリタ・クムとは？

「少女よ、起きなさい」という意味のアラム語です。会堂長ヤイロの願いにこたえて出かけて行き、死にかかっている幼い娘の手をとって、イエスさまが言われた言葉です(マルコ5:41)。今までジェンダーのために十分に発揮することのできななかった女性たちのさまざまな潜在的な能力や感性や行動力が、神さまの祝福によって主の栄光をあらわすために、より生き生きと用いられますようにという祈りと願いをこめて名付けました。